

氏名	松本 悟 教授
こんな研究をしています	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開発援助の制度、効果、影響（国際組織、日本政府、NGO、新興ドナー）</li> <li>・調査の機能（特に環境・社会影響評価）</li> <li>・メコン河流域の地域研究</li> <li>・開発と環境（自然・社会環境）</li> </ul>
こんな成果を挙げています（代表的な著作5点程度）	<p>▼単著</p> <p>『調査と権力』東京大学出版会、2014年。</p> <p>『メコン河開発』築地書館、1997年。</p> <p>▼共編著</p> <p>『国際協力と想像力—イメージと「現場」のせめぎ合い』日本評論社、2021年。</p> <p>『NGOから見た世界銀行—市民社会と国際機構のはざま』ミネルヴァ書房、2013年。</p> <p>▼単著論文（査読付）</p> <p>「中止された環境事業の15年—タイ・サムットプラカン汚水処理事業がもたらしたもの」『環境と公害』49/3、岩波書店、2020年、61-67頁。</p> <p>「開発協力における調査・権力・倫理性—世界銀行の「調査の失敗」と異なる知の共犯関係—」『国際開発研究』24/2、2015年、35-50頁。</p>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<p>上記研究分野以外に、貧困、紛争、資源、森林に関する研究であれば、大学院での指導が可能。研究方法としては、院生の研究目的に沿って、インタビューや文献を研究資料とする質的調査の指導を行う。統計データやアンケートに基づく量的調査については、指導は難しいが助言であれば可能。</p>
こんな授業を行なっています	<p>国際協力の概念やアクター（国際機構、NGO）の役割、開発援助の社会・文化的側面、新興ドナー（中国、韓国、タイなど）、開発や開発援助が少数民族に及ぼす影響について学ぶ。毎回文献を指定し、受講生が分担して講読・発表し、教員が補足的な講義を行う。なお、履修する院生の関心をふまえて、授業内容や使用する文献を柔軟に変更する方針である。</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<p>NHK 報道記者（1987-92）、日本国際ボランティアセンター（JVC）ラオス事務所代表等（1992-96、ラオス労働勲章）、特定非営利活動法人メコン・ウォッチ代表理事等（1999-）、国際環境 NGO FoE Japan 顧問（2009-）、アジア太平洋資料センター理事（2010-19）、外務省開発協力適正会議委員（2011-17、20-）、JICA 環境社会配慮助言委員会委員（2011-18、20-）、ジェトロ環境社会配慮諮問委員など。2018年度はタイ・チュラロンコーン大学アジア研究所で客員研究員。2020年度は環境大臣のもとで検討会委員を務めた。現在、国際開発学会常任理事（人材育成委員）。</p>
私が思う多文化的かつ、インターカルチャーな人物	<p>国際文化研究科修士課程修了の2人を挙げたい。1人は鶴沢光佑さん。修士課程修了後、青年海外協力隊員としてマダガスカルで農村開発に従事。堪能なフランス語に加えて現地語を習得し、村人と有力者の橋渡しとして活躍。その後、開発コンサルタント会社に就職し、南米の防災プロジェクトを担当。もう1人は桑原恭平さん。修士課程修了後、調理製菓専門学校で得意の調理の腕を磨き資格を取得。その後、アラブ首長国連邦のアブダビで有名な多国籍料理のレストランに飛び込み、将来マルチカルチャーな創作料理を作れるよう現在修行中。2人とも自文化を相対化しながら、言語や調理という技能を絶えず磨き続け、多様な文化の中での将来の目標を持ちながら30代を迎えようとしている。</p>